断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑥⑥

高橋 基

―ハルシナイから上流へ⑪―

明治十五年二月に、上川郡は札幌県の管轄となり、その札幌県による上川郡の本格的な調査は、明治十五年にカムイコタンから愛別まで、そして美瑛川筋は辺別川まで、福士成豊によって実施された。

福士成豊は箱館に生まれ、英語力をつけるためにポーター商会に五年間勤務、元治元年(一八六四年)に、後に同志社大学の創始者となる新島襄に出会い、彼のアメリカ密航を手助けし、生涯の親交を結ぶのは有名なエピソードである。また、「ブラキストン線」で知られるブラキストンの気象観測を受け継ぎ、明治五年に函館の自宅に気候測量所を設けた。この測量所が、日本最初の気象測候所であった。札幌の開拓使に勤務してからは、測量・気象観測の中心的な役割を果たしていて、札幌県では地形測量の主任となった。

さて、福士成豊の明治十五年の調査は、詳細な「石狩川上移民地探討復命書」(北海道立文書館蔵)として記録され、その冒頭部分に、付録絵図として**掲載図**の「砥石顕出図」があり、「石狩本川筋神威古丹入口北岸山尾ニ於イテ荒砥石ノ現出セルヲ発見ス」として位置が朱色で明記されている。

福士成豊は補助の平井辰治郎を伴い、九月十七日に札幌を出発、石狩川筋を調査しながら、十月十日にカムイコタン(福士の表記は、カモイコタン、漢字表記は神威古丹―一名我思)に到着した。カムイコタンで一泊し、ハルシナイでは三泊して上流へ向かっている。

明治15年 福士成豊「砥石顕出図」

福士成豊の復命書に添付された「石狩国(各郡)原野気象概調対照表」には、原則的に、①午前七時、②午後二時、③午後九時の三回の温度・天候が現地と札幌と記載されていて、最後に〔異表〕として特記事項の記載がある。比較対照の札幌は朱筆されている。

因みに、ハルシナイの三日目、十月十三日の午前七時の記録は、「〔晴雨計〕二九、七九〇→札幌・三〇、一五四〔寒暖計―華氏〕三二、〇→札幌・三四、〇〔河水温度〕四三、〇〔風雨雪晴曇〕穏晴→札幌・微風晴〔異表〕霜始メテ降ル(札幌ヨリ寒キ―二、〇)」

この気象概調が、九月十八日のホルノタツフから、復路の江別の十二月十二日まで、休みなく克明に記録されている。さすがは日本最初の測候所設置者と感心させられる。

福士成豊はハルシナイに三泊して、十月十四日に上流へ向かい、愛別川川口には十月十八日に到着、二十日まで調査して、石狩川を下り、二十一日には忠別川合流点に宿泊、ここから美瑛川を溯り、辺別川合流点で二十五日まで調査し、二十六日に再び忠別川合流点で宿泊、帰路、カムイコタンには二十七日に一泊して、札幌に向かっている。

福士成豊は、この調査を通して、石狩川の丸木舟の舟楫(舟によって物を運ぶこと。舟運)は、春は五月の上旬より、秋は十月下旬までの六カ月とし、航行の難易で石狩川筋を三区分し、丸堀舟(丸木舟)の大きさを次のように報告している。

「①丸堀舟の難場→カモイコタンヨリアイベツマデ―丸堀舟ニ水夫三名、米一石(註―一石は一斗の一〇倍、一升の一〇〇倍、約一八〇リットル)乃至二石ヲ積ミ早瀬ヲ溯ルヲ常トス。②丸堀舟ノ半易場→空知太(註―現・滝川市)ヨリカモイコタンマデ―中型ノ丸堀舟ニ水夫三名、米四石乃至六石ヲ積ミ早瀬ニ溯ルヲ常トス。③舟楫ノ易場→石狩川河口ヨリ、空知太マデ―大中型ノ丸堀舟ニ水夫三人、米六石乃至八石ヲ積ミ早瀬ニ溯ルヲ常トス。」

なお、上川原野のアイヌの人たちについては、「戸数概シテ三拾戸、人口百二三十、部落ヲ為サズ随意ニ密林ノ中ニ散居ス。全道沿海ノアイヌトハ大イニ其ノ景況ヲ異ニスルモノナリ。」と記している。**(アイヌ語地名研究会幹事)**

※毎月第1週号に掲載します